

衰退する社会 変える方策

ロスト近代

資本主義の新たな駆動因

ロスト近代、橋本努は、われわれのこの時代を、こう命名する。それは「近代」「ポスト近代」に続く、第三の時代のことであり、戦後日本がかつて体験したことのない段階を指している。ロストモダンとは、文字通り「喪失」を基盤とする社会のことである。

労働の価値が何よりも優先され、その見返りも大きかった近代、消費が人々の活動の主軸となり、経済的な豊かさを背景に種々の欲望が加速し肥大化していったポスト近代、そしてロスト近代とは、ポスト近代の栄華の頂点から下降曲線へと向かい、もはや復調の可能性を喪った時代、「自由権や社会権などの近代的な社会の枠組みを維持しながらも、しだいに衰退していくような社会」のことである。

橋本は近代を推進していた「物象化（労働とその疎外）」も、ポスト近代

橋本 努 著

(弘文堂・2310円)

はしもと・つとむ

1967年生まれ。北海道大教授、社会学。著書に『自由の社会学』など。

を駆動した「欲望消費」も、ロスト近代では機能し得ないのだとしたら、その駆動因を何に求めるべきなのか、と問う。本書の主張は、それは「自然の本来的な価値」だとするものである。それは自然（そこには「人間」も含まれる）が持っている「潜在能力への関心」とも言い換えられる。一言でいうならば、エコロジーである。広い意味でのエコロジー的思考を、環境保護や持続可能性の次元のみならず、衰退していく社会を能動的に転換させるためのエンジンとして導入すること、これが橋本が提示するヴィジョンである。

格差社会論や新自由主義批判、グロバリズム批判が陥りがちな誤解への応答から、「3・11大震災と原発事故」の分析を経て、原子力エネルギーからの脱却を目指す「グリーン・インベーション」の提唱へ。「ロスト近代」を、それ以前に巻き戻そうとするのではなく、この時代を可能な限りポジティブに受け入れてゆくための方策を、本書は模索している。それを著者は「第二の文明開化」と呼ぶ。スケールの大きな、そして誠実な本である。

批評家。著書に『二

ツポンの思想』『批評家は何か?』など。

もつ一冊

見田宗介著『現代社会の理論』（岩波新書）。資源・エネルギーの無限性から有限性を条件とする歴史への移行を解説。

